

# 同和教育への希い

丸岡 忠雄

『ふるさと』

“ふるさとをかくす” ことを

父は

けものような鋭さで覚えた

ふるさとをあばかれ

縊死した友がいた

ふるさとを告白し

許婚者に去られた友がいた

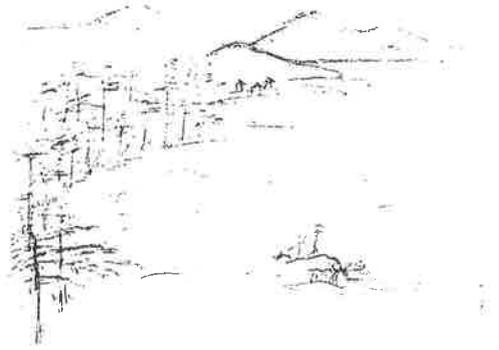
吾子よ

お前には

胸はってふるさとを名のらせたい

瞳をあげ 何のためらいもなく

“これが私のふるさとです” と名のらせたい



昭和4年、世界中が大不況の年、山口県光市の高州、200戸ばかりの被差別部落に生まれた。高州は、真っ白い砂浜に緑の松原、風光明媚なところ。しかし、徳川時代から、この里に住まわされた人々は、この美しい自然とは裏腹に、大変厳しい条件のもとで生きてきた。

真っ白い砂浜では、地引き網で漁もできる。すぐ北側には美しい田圃が並んでいる。それでいて、徳川の時代には、高州には一隻の舟もなく、東と西の両部落（この部落とは被差別部落ではない）では、漁船を持って漁に出ているのに、一隻の舟もなかった。

私の部落は、高州（たかす）と書く。その名の通りもともとは川の末にできた州である。真っ白い砂とは、作物のできにくいところ、そこに住居がある。きれいだけど、自然環境の厳しいところに、最も不況のどん底のとき、10人兄妹の9番目に生まれた。8人、男兄弟がいて、私は七男、八男に弟がいる。

厳しい条件と、貧しい生活の中で育ったけれど、昭和4年生まれだから小学校に入学したのは昭和11年。小学校時代を振り返ってみて、小学校1年から6年まで先生や友たちから、部落差別にかかわって何かいやな思いをさせられたことは、一度もなかった。例えば、「橋のない川」（住井すえ）に出てくる孝二たちみたいな、「破戒」（島崎藤村）に出てくる話のような、そんな思いをさせられたことはない。被差別部落の生まれだということで、お前は高州だろう。いやな表現で言われた体験はない。それでは差別を受けなかったのかということそうではない。私は、やはり厳しい差別の中にいたんだということを改めて思う。

その一つ一つを申し上げながら、差別が単に言葉で言わないから、何か特別なことをしないから、差別をしていないんだということには、ならないことをわかっていたきたい。

小学校1年生から自分が地区（被差別部落）の生まれなんて知っているはずはない。どのような時期に、どのような機会で、自分が部落の生まれであるかを知るか。それはいろいろであるが、私は小学校5年のとき、私の友人が教えてくれた。

「おい、丸岡、知っとるか。この高州というのはなあ、よそと違うんぞ」

「よそと違うとはどういうことだ」

「いや、おれもよく知らんけど、大人が話していた。実は、この高州はこれなんだよ」

指4本を出して、おれたちは、これだ。だから違うんだと、指4本出して説明はしてくれたんだが、それがどういう意味なのか、その友だちも知らない。

家に帰って母に聞いてみた。

母は、小学校1年生の途中で目を患って、それがきっかけとなり、家は貧しく学校へ行けなかった。片仮名がやっと書けるぐらいの力しかない。母は、学問はなかったけど、私の部落では、「やり手ばあさん」なんでもできるやり手のおばさんと言われ、わからないことは、何を聞いてもきちんと教えてくれる母であった。

私は、母に指4本のことを聞いてみた。母は形相を変えた。日頃、母にあまり叱られた経験はない。その叱らない母が、指4本のことを聞いたとき、顔色を変えた。

「そんなこと言うもんじゃない」

まるっきり違う剣幕に恐れをなして、このことは口にはいけないうこととはわかったけど、なぜ口にはいけないうことについては全然わからない。何にもわからないけど、そのことについては言うてはいけないうことだけがわかった。

5年生の子どもでも、そう言えば、あのことかなど、子どもなりに思い当たる節があった。なぜか理由はよくわからないが、私は高州に生まれたということが、なにかとても恥ずかしいことのように思っていた。恥ずかしいと思う内容はいろいろあった。例えば、当時貧しかったのは高州の子どもたちだけではなかったけど、他の地区の子は貧しくても学校へだけは来た。高州の子は全く来ない。また、両親がどこか遠くへ商売に行ったり、まったく帰って来ない家というのは、高州以外にはない。他の地区では、冬になると温泉に湯治に出かける親がいる。高州には湯治に出かける親はいないけど、5月のお祭りがすむと、両親が全部出てしまつて、子どもだけになるという家がいくらもある。私の家では、両親は家にいたけど、百姓しようにも、3反ばかりの小作で、家族全部がそれだけで食べていくことができない。したがって、百姓仕事のない時は、母は毎晩のように、草履を作っていた。そして、日中は、竹で編んだ籠を天秤で肩に担いで、2里も3里も離れたところへ、ポロ買いに出かけた。

他の地区では、貧しい友だちはいるけど、草履を作っても売るといふ家はないう。どんなに貧しくてもポロ買いに行く家はないう。子ども心に、母が「学校へ行つて、お母ちゃんが草履を作つていふことを言われんよ」といふ言葉が、不思議に響いて腑に落ちない。草履作りと言つたら、すぐ思い出すのが、当時修身で習つていた二宮金次郎の「柴刈り、縄ない、わらじをつくり、親の手助け、弟を世話し。」修身で習う草履作りは、孝行の手本であるのに、「どうして言つてはならないのかな」と思つた。きれいな鼻緒の竹の皮の草履、それを作つて売ることがどうして恥ずかしいのかわからなかつた。(それは私の母だけでなく、部落の親たちの重要な内職であつた。)

また、10人兄弟の一番上の兄、親と子ほど年が違つていた。その兄のことで母は、いつも私に言い聞かせていたことがある。

「お兄ちゃんが肉屋していることを言うんじやないよ」

兄が刑務所にでも入つているとか、悪いことをしていることを言うなといふのならわかるけど、肉屋をしていることを言うなといふことの意味がわからなかつた。

小学校を卒業して、すぐに門司(現在の北九州市)に奉公に出で、苦勞して結婚して、宮崎県の都城で店を持たせてもらつて、立派に頑張つていふ兄のことを言うなといふことの意味がわか

らなかった。

肉屋、靴屋などは、今でこそ、どなたでもしているが、当時は部落の人が圧倒的に多かった。

そうしたことから、なぜ言うてはいけないのかわからないまま、いけないのだという思いだけが胸の中にたまってきたような思いがする。

5年生のとき、何も教えてもらえなかったけど、その意味がわからなかったけど、何かあのことにつながっているんだということ子ども心に悟っていった。教えてくれたんじゃない。獣のような鋭さで部落は隠さなければならないこと、恥ずかしいことなだ感じていった。

だれかが教えてくれたのではない。本能のように隠すということを感じていった。

小学校5年のとき、私を大変かわいがってくれた先生が、友だちと二人で放課後、習字を教えてくださいました。天神さまへ奉納するための習字を書くためにわざわざ残して練習させてくださいました。

その席のこと、「丸岡君、それはそれと一番上のお兄さんはどこにおるのかね。」と先生が尋ねられた。「はい、兄は宮崎の都城におります」そして、「何をしよるんかね」と聞かれる。私は即座に「店をしています」と答えた。先生は、そのことを調べて、記録にするために聞かれたのではない。雑談の中で他の事務をしながら、「何をしよるんかね」と聞かれただけなのに、母がいつも私に「肉屋をしていることを言うんじゃないよ」と言い聞かせていた。でも、私を残して習字を教えてくださいました先生に嘘を言うてはいけないという思いがある。

先生に嘘を言うてはいけないという思いと肉屋をしていることを言うてはいけないという思い、その思いが重なり合って、先生の「何の店かね」という問いに、「あの、食料品を売っております」と言った覚えがある。このなんでもないこと、ごく小さいこと、一週間たったらとつに忘れてしまうこと、それがあの時、肉屋と言えないで食料品を売る店と言っている。何十年もたって部落問題の勉強をして初めて、誰が教えたっていうのでもないのに、どうしてあんな悲しい知恵が私についてしまったんだろう、そう思った。そういうときはこういうもんだよ、と兄が私に教えてくれたわけでもない。母が教えてくれたのでもない。誰にも教えてもらってなくても、そのことずばりを言えないで子供心に懸命に考えた末が、肉屋を食料品屋と言っている。なぜそう言わなければならないのか何も分からない。子供の時、分からないということ、どうしても納得いかないこと、でも、それが中学生になり、高校、大学に行き、学問が進むようになって分かるようになる。ああ、あれはこういうことだったのか、ああそうかというふうに。ところが部落問題だけは逆なんです。知恵がつくにつれ、社会的に視野が広がるにつれてだんだん分からなくなる。どうしてそうなのか。小学生の時、小さな問題であったはずなのだが、中学生になると、「丸岡、どこだ、お前のうちは」こう言われるのがどうにも耐えがたいぐらいいやになった。うその通用しない相手というのは同級生なんです。だからふるさとを高州だと言えばよい。うその通用しない相手にでも高州がでない。私の詩の中に高州という言葉が、どんなに重たいかというのを書いたのがある。

ふるさと

いちばん なつかしいことば

いちばん おもたいことば

いちど

いきを ととのえたうえて

やっという



ふるさとの名

タ・カ・ス

と書いている。一度息をととのえないと出てこない。でも私が部落の中に住んで、そこから学校へ通ってその間はまだそれほど重たいものではなかった。本当にこれがやりきれない、こんなにも重たい重荷になったのは、ふるさとを出て一人になった時である。

昭和19年、戦争も終わりに近く負けていたころだったが、神国日本は負けるはずがない、必ず勝つんだ。そういうことを信じさせられていた。その19年は、私は旧制の中学2年生だった。友人たちもたくさん少年兵として戦争に行き、予科練に入り、皆学校を出て行った。小さい体であったが、私も兵隊になろうと思った。中学2年から受けることのできる昔の幼年学校（昔の陸軍の将校を養成する所）、軍の幹部養成としてエリート教育するための徹底した英才教育のなされた学校であり、少年たちのあこがれの的であった。

私は光中学校一期生（光市人口5万、現在新日本製鉄、武田薬品等の工場は戦時中、海軍工廠〔弾丸・魚雷、人間魚雷回天〕のあった所）、海軍工廠の設置に伴ってできた県立中学校の一期生であった。19年に幼年学校を受けて合格、熊本へ行った。約30人受けてたった一人合格。当時の幼年学校の競争倍率は25倍から30倍であった。昭和57年の夏、その時の光中学校の校長先生を招いて同窓会を開いた。校長先生は覚えていてくれて「丸岡、元気か」と声をかけてくださり、涙が出た。40年たつのに担任でもない校長さんが出会うなり、丸岡元気か、と言ってくくださる。「青柳の世にさきがけて咲きにけり」という句をくださったことを申し上げたら、そうだったかな、と笑って言われた。この句の中に初めて合格してくれたという喜びが含まれている。そんな気持ちで熊本に行った時、どんなに有頂天になっていたか。それが熊本に住んでいてしばらく生活するうちに、私を愕然とさせることがあった。熊本の町に部落がある。これは本当に驚いた。驚きというより、恐ろしくなった。中学2年の頭で高州のような所は私が住んでいる所、私の親戚のある所だけに部落はあると思っていた。日本中に部落があるなんて全然思いもしなかった。

部落はなぜあるのか、そのことをきちんと教えられていたら、熊本に部落があるということは、行く前から分かっていた。あたり前なのだ。そのあたり前のことが私にとって思いもかけないショックなことであった。生徒たちが日本中から集まっている。その生徒の中で、東京の町中から来たものはあまりよく知らないけど、関西・中国・九州から来たものは部落のことについて知っている。そういうことが話題になるとしばらく話は続く。その話を聞いていると、ほめた話が全くない。軽蔑した話、恐がる話、汚いという話、悪口ばかりである。軽蔑、恐れ、嫌悪である話題が出た時、私はどうしたらよいのか。「おい丸岡、お前はどうか」と言われた時、返事ができない。「なんだお前、そんなこと言うんじゃないよ。同じ日本人で、俺はそうなんだぞ」それが言えれば楽なんだが、なんでもないことなのに、でもそれが言えなかった。言えないどころかそんな話が出ると、調子を合わせてしまう。「そうやな、そうやな、うちの方にもあるが、あまり相手にせんほうがいいな」と。はじめ、小さなうそでも言うものじゃない。そのうそをカバーするために、次のうそを言ってしまう。そのうそをカバーするためにまた次のうそを重ねる。私は部落と全く関係ない人間だというような素振り続けた。しかし、そんな話題の出る度に、なんともやりきれない、ひきむしられる思いであった。

春には  
わかものが むらを出る  
とりわけ 少し上の学校を出たものが いくにんも出てゆく

ふるさと遠く ひとりになると  
わかものふところでは  
“ふるさと”が急にずっしり重たくなる

“部落”の話など出ると とたん  
息をつめ  
ケンメイに 平気を装いながら  
ひそかに ふところをまさぐってみる  
みなに調子を合わせるのだが  
ふところには いつしか血がにじんでしまっていたりする



ひきむしろうにも  
“たかす”は決して剥ぎとれはしない

また、「かつて」という詩に  
異郷に ひとり ふるさとを 否む  
それがどんなものであるか、一人になって初めてわかった。それがどんなに重たいか、初めてわかった。

でも私は光中学校の一期生だ。誰も来ていない。調子を合わせていようが、私のことを言うものは誰もいない。

昭和20年の3月「おい丸岡、お前の所の光中学校の後輩が二人入って来るぞ」と知らせてくれた。軍の学校とはいっても、なんたって子供。ふるさとが懐かしい。親元が懐かしい年頃。先輩・後輩を非常に大切に作る間から、後輩が来ると飛び上がるほど嬉しくなる。これは誰でも感ずる感情。ふるさとのものが来たと聞くと、わざわざ尋ねて行っても、「よく来たな、お前どこから来たのか」と懐かしがって手を握り合って話す。それがふるさと人だ。ところが、私に浮かんだ思いとは、ふるさとの人に会える飛び上がらんばかりの楽しい思いではなかった。「よかったなあ」と思った。「あのことを知っている子が来なければいいがなあ」と思った。

やはり「かつて」という詩で  
故知らぬ かげにおびえ  
“ふるさと”の重みに息をのみ  
異郷に ひとりいて  
ふるさとびととの邂逅を  
わたしは蟹のように怖れた

これは私がそうした特異な感情をもって、私が思いすごして、私だけがそういうことを思うんだろうか。ふるさとの人に会うのが怖い。そんなばかげたことを感じるのは私だけだろうか。こ

それは後に部落問題を勉強し、多くの部落の人たちと接するようになって、いくつもの例、話、事例を耳に目にし、私だけでないんだということをはっきり思い知らされた。私には一人の弟がいる。山口県大島の商船学校を出た。今、船乗りで神戸の川崎汽船の機関長をしている。その弟に（昭和33年頃）ト短調という詩集を贈った。2、3年たって神戸にある弟のアパートに行った。机の上の本棚にト短調の詩集がたててあり、私は手に取って見ていた。見ているうちにドキッとしました。アッと思った。部落の部の字も書いてない詩集の一番後ろにある奥付を見た時、ギクッとしました。『著者丸岡忠雄山口県光市浅江高州』その高州の二文字は墨で塗りつぶされていた。

山口県の高州が低い州であろうと、部落だとわかる可能性がほとんどない神戸なのに、墨を塗った弟の思いがわかる。かってふるさとの人に会うのが恐かった、あの思いと同じだった。俺だけじゃないんだなと思った。そんなにも重い、そんなにも辛いふるさとであるのに、なぜそうなのかということがまるで分からない。日本人でないのかもしれないと本気で思った。

昭和24年から小学校の教師になった。教師になって数ヶ月たたないうちに教えていた5年生の女の子から授業が終わったすぐ後で、「先生、これ何か知つとるかね」と言われたことがある。その子が私の顔をニヤニヤ見ながら、指を4本出して私の前に突きつけてきた。私は返事ができなかった。「あっ、先生の顔が赤くなった」そう言いながらキャッキョウ言いながら外へ出ていった。たったそれだけだった。子供は何の考えもなくちよつと私を試しただけだった。家で聞いたことを今度新しく来た若い先生に言うてみただけだ。

“センセ コレナンカシツチヨルカネ”

目の前に四本指突き出して  
女の子は僕を見てわらっていた

こおるおもいで立ちつくした 一瞬

“ヤア センセイガアカイカオニナツタ”

女の子の声を背に  
かえすことばも知らず  
やっとなりの僕は  
こぼれそうな涙をこらえて教室を出た

僕にはあまりにはっきりわかるのだ

この子の家の団欒の席で  
新任の助教のことが夕餉の食卓の話題にのぼり  
大人たちが その折  
どんなことを子供に教えたか

“センセ オハヨウ”

その後も 子供は何でもない無邪気な声だが  
メスよりもするどく一突き僕を刺した  
その子の指の  
痛さは



十年経て

昨日のように鮮やかである

無邪気な行為であることは分かっている。何でもよいようなことと思えるかもしれない。去年、この話を出した。高校3年の子が「どうしてそれぐらいのことでショックなんかなあ、そんなことなんか笑い飛ばしておけばよいではないか」と言う。本当にたいしたことではない。でも私はたったそれだけで教師を辞めようと思った。ダメだと思った。

こんな小さなことで、しかも無邪気にやったことがわかっていて、そのことがそんなにショックなのにとて教師はやれない、こんな弱虫じゃ代用教員だといっても教壇に立って人にものを教えようという身なんだ。そして自分のことなんだ。どうして部落があるのか知らない。日本人でないのかも知れない。そういえば思い当たる節がある。戦時中、光海軍工廠建設のため一番危険な仕事をした人たちは、広島 of 刑務所から来た人たちと、朝鮮から来た労務者であった。あふれるほどの朝鮮から来た人たちが、高州に住み着いている。戦時中すでに畑のできなくなった私の家にも3組の朝鮮の人がいた。皆いい人だった。日本語もわからない、若い朝鮮の婦人が片言がわかるようになって、私たちと交わるようになって、本当にいい人たちであった。高州の人より多い朝鮮の人のことを思い浮かべて、朝鮮の人と先祖が同じなんだろうかと思ったりもした。（意識調査の結果によると、現在なお先祖が違うというのが20%ある）また、朝鮮の人に対する差別感がいかに根強く、文化的にはむしろ私たちの大先輩であるはずの人たちを、明治以後どんなに差別してきたか、その一つの証でもある。

その後師範学校研究科に6ヶ月在学した中で、部落問題だけはきちんと学んでこよう、このことをきちんと知っておかないと、子供のあの行為から受けた大きなショックから逃れることができないと思った。

昭和24年その半年、歴史を教える若い東大の史学科を出たばかりの潤間という先生に出会った。貴重な出会いだとしみじみ思った。その先生との出会いがなかったら、こういう部落の詩は書いていない。こんなに胸張って部落問題とは向き合っていない。おそらくうつむいたままで、やはり部落は恥ずかしいこと、部落は隠しておくもの、そういう思いでずっと過ごしたに違いない。

どうして部落ができたのか。つくられたのか。残されたのか。明治の時代には、大正の時代には、……20才になって、私は生まれて初めて知った。私は真実を知って初めて目の覚める思いがした。歎くことより怒ることだ。後に私が部落についての詩を書くゆえんである。

なんだ、そんなことだったのか、恥ずかしがることはないじゃないか、そう思うと猛烈に腹が立ってきた。今度は元気出して先生をやれる。子どもが指4本突き出してきたとしても、それを笑って受け流していく、あるいは、その子に話してやることだってできるかもしれない。もう前みたいに恐れない。そう思った。それから数ヶ月、結核が再発し、10年間の療養生活で20代全部費やした。療養中、詩の仲間を得て詩を作り、書きためたものをまとめて詩集ト短調を発刊した。その時、その詩集を発行したとき、一番大切なものが欠けていることに気がついた。部落のことについて触れてない。あれほど勇気づけてくれたのに書いてない。頭の中に理解できても、具体的な作品になって目の前に現われるために、もう一步何かがある。

療養所の仲間の中で、部落の話が出る。前みたいに気に病んだりもしない。でもそんな友に「そんなこと言うなよ。俺はそうなんだから」とは言えない。例えばこういう言い方をする。将

棋をしている仲間と、憎まれ口をたたき合いながら「お前、きたない手つかうな。まるで四つみ  
たいな手をつかうな」と言う。非常に仲のよい友であったがその友に「俺はそうなんだよ」とは  
言えない。そういう感じ方でしか、部落をみていない。いくら表面仲がよいように見えても、そ  
の部分だけはあかせない。胸が開けない。そのもどかしさを磯村英樹氏（詩の仲間「らくだ」）  
あてに綿々と綴った手紙を送る。返事が来た。“友のことば”という題で詩集に入れてある。

「よく話してくれた。いろんな差別問題には口角泡をとばして論じていながら、身近な問題であ  
るこの部落問題に全く無関心であった自分が恥ずかしい」

磯村さんという人は私を喜ばすために上手を言うことの全くできない人、正直に自分の思いを  
言うことしかできない人。その人がこの問題に無関心であった自分が恥ずかしいと書きながら、  
その一番しまいのところに「まず身近な問題から取り組まなければならない。若い自分の息子が  
部落出身の人と恋愛し、誠実に息子を愛してくれるのだったら、私は喜んで息子と力を合わせて  
周囲の圧迫とたたかうでしょう」と書いてあった。

今、正直言って私の周りの仲間でござりません。こだわるわけがないではありませんか、と  
いう仲間をたくさんもっている。でも昭和30年代に、私はこれを聞いて、しかもその言えな  
い磯村さんから聞いて、こんな友達のいるところだったら何でも言えると思った。私の一番底に  
ある部分、今まで誰にも開いて見せたことのないものを、こんな仲間のいるところだったら、何  
でも言えると思った。何でも話せると思った。話さなければいけないと思った。

「らくだ」63号に、「指」という作品を出した。部落とすぐ分かる作品を初めて書いた。そ  
れを編集した磯永英雄が63号のトップに載せた。表紙を開けたところに「あのレイアウトの意  
味わかったかね。十字架だよ。君はそこから逃げてはいけないんだ。君はこればっかりうたうん  
だ」と言われた。

その時一通の葉書をもらった。「『指』という作品、私が詩の道へ足を踏み込んだのはこのこ  
とをふりかざしたかったのにどうしても書けず、あせりだけですのに、あなたが書いてくださっ  
たことは嬉しく敬意を表したいと思います。書いてください。私も書きます。「らくだ」の仲間  
の中に私以外に部落のものがいた。しかも、そのことを書こうと思って入ってきた。何年もなる  
のに一行も書けない。「あなたよく書いてくれた。私も書きますから一緒に書きましょう」そう  
いう仲間がいた。真原牧なんです。そういう思いをたたきつけてきたのが「五本目の指を」とい  
う詩です。

私が はじめて恋を知ったのは  
二十一の秋  
私はかぎりなく彼をしたい  
彼はやさしく私をいたわっていたようだった  
冬になると  
彼の部屋のコタツに火を入れて  
私達は話し合った  
私が彼のオヨメさんになる日のことを――

その夜は 雪がシンシン しずんでいた・・・・

“春”になったらネ

指切しましょう

私の指がかわいいと言って からめた指を  
二人は永い間大切にしていた

その彼が 私を四本指 だと言い始めたのはいつからだったか  
彼のお母さんにあった日から  
二人の上に春は来なくなっていた

私には見えないけれど  
たしかに指が 四本だという

切れたのは指切した指だろうか  
約束を守らなかったのは 私ではなかったのに  
私は四本指の娘だという  
持って生まれた不幸せだという

私は想った  
私は泣いた

生まれ出た家のひくいのきのこと  
ねこのひたい程の耕地をむさぼる一かたまりの部落民のこと  
血族結婚の末の精神異常者のこと  
若者たちは自暴自棄  
追いかえされた若妻  
テテナシ子

私は死のうと思った  
傷をいやす為に  
ちゃんとした五体になる為に  
私の心の中でブツツリ切られてしまった  
五本目の指を  
その指をかえせ  
その指をかえせと  
うたいながら

傷口はいえないだろう  
傷口はいえないだろう  
傷つけたものへのいかりとなって  
その口はひらくだろう  
なお大きく  
深く



いたみながら  
うずきながら

私のどこが違っているというのか。私はこの詩集を作るときに、息子の手形を押させた。その子がもう中学3年を卒業します。そのとき、3つ上だった子が、高校を卒業する。私は子供が生まれてきた時に、療養生活のため結婚が遅れ、36才にして初めて子供を得た喜びに、どう表現したらよいのか。これまでに書き続けていた詩を、これでもか、これでもかと差別の現実を訴え、世に問うた。

オーイ ミンナみてくれ  
りっぱに 手足の揃った男の児だぞ  
よーく見てくれ  
指も五本だ  
欠けてやいないぞ

どっことも違わないんだ。この子たちに決して悲しい思いをさせてはいけない。ふるさとを人前で口にできないような、そんな子供にしてはいけないんだ。部落問題を本気になって学ぶ、そういう姿勢は子供を得て、はっきり、しかも強いものとなった。「差別」そんなものまだあるのかという声を聞くことがある。私はその実例をいくらでもあげることができる。詩を書き始めて20年にもなるのに、まだいくらでもその例をあげることができる。

残念ながら、例えば結婚、厳しいものが残っている。残っているといいながら10年前と20年前と、時代を輪切りにしていくと歴然と違う。そのことは、厳しいものが残っている中でも認める。就職はというと、下松、徳山、光と従業員5000人を超す大工場の林立すると真中において、200戸1000人の人口をもつ高州にたった一人の工具もいなかったという事実、この事実を詩に書くことで激しく訴えた。こんなばかなことが厳然と存在している。昭和34年当時、何万という工具、どんな小さな部落にでも一人や二人の工具がいる。そのような状況の時にも一人もいなかった。ひどい就職差別というものがあった。(詩「高州」)今では何人もいるが、20年前の悪い状態が一度によくはなるはずはない。少しずつ少しずつ良くなってきている。そういう状態の中で、とくに中高年に不安定な仕事をしている人がたくさんいる。町並みはきれいになり、住宅はたくさん立ち、公共施設も立派なものできて、保育園もできて、結婚もできつつあるが、差別の傷を抱え込んで生きているのが私の部落の現状である。

昭和49年、地域の中で若者たちと部落問題を勉強する会を始めた。光市地域部落研30人、約3年間、毎週部落問題を勉強することを始めた。

自分たち自身  
部落問題とのかかわり  
私自身の生きざま  
高州の人たちの生き方  
何をして生きてきたのか  
具体的に学んでいく仕事

その中で部落の仕事を調査していった。

なぜか分からないが、5月に部落の親たちが出ていく。みんな部落の人が地元では稼ぎようがない。地元では子供を養っていくことができない。そうしたことから、たくさんの部落の親が出ていった。部落ではそのことを“上下いき”といていた。その内容を学んできたとき、声を上げそうになった。恥ずかしいと思っていたことの中に、深い意味のあることを知るようになった。例えば、猿まわし、周防猿まわしの復活。部落の中でさえ、貧しさの差別の象徴のように考えられ、言われ扱われてきた、それが大道芸としてすばらしい内容をもっていることが後になってわかった。

母に「同級生のところにボロ買いにいかんといて。恥ずかしい」と言った。「何の恥ずかしいことがあるうに。悪いことしているんじゃない。お前も大きくなったらわかるよ。」母はそう言って取り合ってくれなかったけど、その頃の部落は、どういう状態におかれ、その中で人々が何とか生きようとしてどんなにもがき、どんなに懸命になっていたか、その様子を順々と知るにつれて、私はかつて自分が恥ずかしいと思っていたことが恥ずかしい、そう思うようになった。

子供で学校へいかない子がたくさんいる。例えばよそのなり木のものとか、芋とかそんなものとして食べるような子は、高州にはたくさんいる。そういう友が高州にいるということはとても恥ずかしかった。自慢できることではない。悪いことに決まっている。しかし、そうしたときのなり木のものを取ったり学校へ行かない、子供たちの悲しみについてはそばで見ているがよくわからなかった。

部落問題をじっくり学ぶ中で、その時の子供たちの悲しみや、子供をおいて出る親たちの悲しみが改めてわかるようになった。

例えば“上下いき”“猿まわし”のことを書いた長い詩

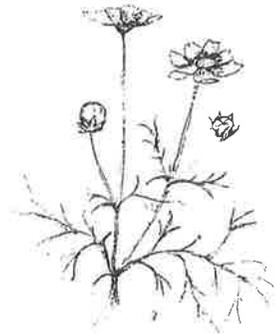
出立（でだち）

おとうとおかあが  
いよいよ じょうげに行く  
けものの臭覚のようにそれをさとった僕は  
何といわれようと  
その日ばかりは 学校へ行きたくなかった

“きっと沢山みやげ買ってやるけえ”  
おかあは そういって僕をなだめすかし  
学校へやろうとするのだけど

出てしまうと  
一年近くも おとうたちは帰ってこない  
幼い兄妹とばあちゃんだけの生活なんぞ  
想っただけで泣きたくなくなってしまう

僕は泣きじゃくって登校を拒んだ  
～～去年も学校に行ってる間に  
ふたりは 旅に出てしまった  
学校から帰ってそれを知った僕は



無駄とわかっていながら  
泣きながら 駅まではだして走った

春までの 淋しかった一年を忘れない  
みやげなんて要らない 何にも欲しくない

とうとう おとうの平手がとんだ  
それでも 僕は学校へは行かなかった  
おとうの目がぬれていたのを覚えている

出立は一日延びただけだった  
夏も間近いという頃なのに  
僕たち兄妹には  
冬のような凍った季節が またはじまった

親たちを上下に送ったそういう人の話を直接聞いて、詩にした作品であるが、その残された子供たちが、例えば学校へ行かない、両親も誰もいなくて子供だけしかいない、そういう家庭がたくさんあった。また、両親がいてさえ学校へ行かない家庭がある。両親がいないので学校へ持って行く金がなくて、食べるものもなくなって、よそのなすび畑でなすびをもぎながら塩をつけて食べたという話を聞いたとき、どうしてその時学校へ行かなかったんだと、そんなこと言えるはずがないと思う。

そういう反論を許さない、厳しいものが存在したということに思い至る。子供が非行に走り、手に負えないようになった。その時にやはりその子供の裏側まで知って、その子供の身になって考えてやらないといけないんだということをこういう問題を学びながら改めて思う。

部落問題を学びながら「同和教育への希い」と題をつけたが、どうあってほしいか、私の体験からどうあってほしいかということの子供たちに伝えてほしい。何よりも本当のことを教えてほしい。それもきちんと、あやふやなことではなくて真実を伝えてほしい。

部落が恥ずかしくなくなったのは、部落問題を自分で勉強するようになってからだった。理論としてわかった段階では、まだだめだった。母のことにしても、上下いきにしても、高州の人の悪いと言われる言葉にしても、悪いんではない。上下の商売の中で使う隠語が部落の中で使われる。それを子供が真似をする。言葉が悪いのではなく、あれは上下の中で商売するに必要な大切な手段としてあみだした貴重な言葉であったんだ。改めてそのことを知って、言葉の収集をやっている。それだけで会話ができるくらいに豊富な内容をもっている。恥ずかしいと思ったことも本当の姿を見ると、そうでないんだということがわかる。

徳川時代の差別というけど、山口県に残っている膨大な資料を丹念に調べていくと、それはつくられたということがはっきりわかってくるし、地区外の人にとっては、差別しないということだけでも罰せられたという事例が、御仕置き帳にはっきり残っている。本当のことをきちんと学ぶことによって、恥ずかしさなんか存在しない。恥ずかしいのはむしろ、そういうことに身を縮め、卑屈な姿勢でいることが恥ずかしいんだということを公然と胸張って言えるようになった。

次に、何でも信じ合い、話し合える仲間を作っていかなければならないと思う。「お前だった

ら、絶対、俺の一番恥ずかしい部分と言える」そういう人をもっているか。そういうものをもっている人は幸せだ。人によっては妻にだって言えない部分があるかもしれない。でも、お前にだったら俺の一番恥ずかしい部分と言える。一番底にある部分、全部さらけ出せる。そういう信頼し合える仲間を作るといことが、この問題を解決していく大変大きな力になる。私は自分が潤間先生に習ったはずなのに、どうして部落のことが書けなかったか。それに近いような作品は書いている。でもはっきりそうだとすることがなぜ書けないのか。

私は磯村さん、磯永さんや真原という仲間を得て、ありったけのものが書けるようになった。人間は、本当に傷みを味わったものでなければわからないという。しかし、そのものはわからないかもしれないが、わかち合うことは可能だと思う。人間だったら……。本当に悲しんでいる人間と一緒にあって腹を立て、一緒にあって悲しむことは人間だったらできる。他人の痛みがわかるということは、同和教育の最も大切な部分と思う。

一人一人の人間、その生命の尊さを思う。それが掛け替えのない存在だと考える。これは差別問題を考えていくときに、非常に大切な基礎となる。私はどんなにつまらない私であっても、もう一回私に生まれてくることはできない。たとえば知的に全く恵まれない人、障害を持つ人、それがどんなに重い一生であろうと、たった一回の人生、それを大事にしなくてどうする。それを駄目な人間だからと言って、役に立たないからと言って、その人間に価値がないもののように、いかにも人間としての値打ちが下がっているように言う。

部落問題、差別問題というのは、人権の問題だと言われる。人権無視とは、まさに人間を人間扱いしていない。人間としてあたり前の扱いをしていない。一人前の扱いをしていない。だったら、どこも悪くない。本当にその人を愛しているのに、どうして部落だからいけないというのか。学生時代、あんなに懸命に勉強して何でもできて、働く意欲と能力もあるのに、部落だからということで、職をシャットアウトとする。そんなことが許されていいのだろうか。人権を侵している。そのことを許している。見逃している。新しい憲法の侵してはいけない部分、97条に基本的人権の本質が書いてある。

日本国民に保障される基本的人権は、人類の多年にわたる自由獲得の努力の成果であって、これらの権利は過去幾多の試練に耐え、現在及び将来の国民に対し、侵すことのできない永久の権利として、これを保障するものだ。

人間は人間として大切にされなければならない。人権とは人類の宝であり、差別はその宝への挑戦なんだ。許されない。人間が人間として大切にされる世の中、私はどういう政治形態になっても、一番大切な基本である。私たちの責務は、本当の民主的な世の中をつくることだと思う。本当の民主的な世の中とは、誰もが生きてきてよかったと思える世の中、それをつくること。それが私たちの生きることの意味だと思う。

自分自身のためにしなければならない。子供たちのためにしなければならない。そうしたときに、部落問題は、部落の人だけの問題ということは、かりにも言うことはできない。生きがいのある社会になるために、一緒にがんばっていく。それが子供たちへの最大の財産だ。これが私のふるさとです。そう、私の子どもも、どなたの子どもも、胸張っていえる、そんな社会にしたいと思う。

※この作品は、丸岡忠雄先生が1983年2月5日に徳島県麻植郡鴨島町で講演された内容を佐藤文彦先生がまとめられたものである。

# 1991年度板野郡同和教育研究大会公開授業の記録（板野中学校3年B組）

主 題 「誇りうる生き方を求めて」

1991年6月25日（火）

資 料 「同和教育への希い」（丸岡忠雄）

授業者 森 口 健 司

T 1：丸岡さんの資料をみんなで勉強してきたわけですけど、今日は丸岡さんの生きざま、生き方に寄せる思いを語り合いながら、私たちの生き方、あり方を考えていきたいと思います。非常に蒸し暑い中ですけど、みんなの思いがふくらんでいく1時間にしたいと思います。

T 2：丸岡さんは部落問題を学ぶことによって、「かつて部落に生まれたことを恥ずかしいと思っていた。そのことが恥ずかしいと思うようになった」と言われています。その丸岡さんの思いについて、みんながこの学習の中から思うことを発表してもらいたいと思います。

SN(女)部落がどのような理由でできたのか。今までどうして差別され続けているのか。しっかりと学習する機会がなかったからだと思います。私たちは今、学校で部落差別について学習しているけど、昔は学習する雰囲気ではなかったからだと思います。

MM(男)丸岡さんが部落に生まれたことを恥ずかしいと思ったのは、やはりまわりに負けてしまいそうな差別があったからだと思います。部落問題を学ぶことによって丸岡さんは本当の自分の生き方というものを見つけ出すことができ、恥ずかしいと思うことが恥ずかしいことだと、丸岡さんは気づいて、自分の間違いを正していくことができる人になったからすばらしいと思います。

YI(女)私はどうして部落に生まれたことが恥ずかしいのかわからないんですけど、やはり差別があるから恥ずかしいと思込まされているんだと思うんです。もしかしたら、私も板野に生まれたことが恥ずかしいと思うようになるかもしれないけど、板野には、私を一生懸命育ててくれたおじいちゃんやおばあちゃんがいて、一生懸命頑張ってくれているおじさんやおばさんのいることを忘れないように、今この勉強を真剣に進めていきたいと思います。

T 3：今、3人が語ってくれたけど、付け加えて発表してください。

HI(男)やっぱりまわりの環境が、部落に生まれたことを恥ずかしいように思わせていたんだと思います。それで、親とかも仕方なしに子どもの幸せを願うならという感じで恥ずかしいことだから、世間に出さないように、かくすように教えていったんだと思います。

T 4：差別が恥ずかしいと思わせていったということ。

SE(女)部落の人たちはまわりの環境によって、部落は恥ずかしいという感じを植え付けられていったんだと思います。それで、結局、差別はいけないとわかって、部落を恥ずかしいと思うことは、自分に差別意識があるということだと思うから、差別がいけないということがわかって、差別意識を持っている自分に気づいて、恥ずかしがるのが恥ずかしいことだと思うようになったんだと思います。

T 5：自分自身の中に差別意識があったという発言についてどうだろうか。

Y0(男)部落に生まれたことが恥ずかしいって思うようにしていったのは、まわりの人だと思います。小さい頃はそんなことを知らなかったし、そんな恥ずかしいという思いはなかったのだから、まわりの人によってそう思わされてきたと思います。

YI(女)私もEさんが言ったように、自分が部落に生まれたことを恥ずかしいと思うのは、自分の差別意識があるということで、部落ということを侮辱しているから恥ずかしいと思うんだと思いました。

T 6:今のEさん、Iさんの発言についてどう思いますか。

SN(女)私も同じような意見なんだけど、自分が部落出身と聞いた時や部落出身でないで聞いた時に、ほっとしたりすごく悲しくなったりするのは、やはり自分の中に差別意識があるからだと思います。安心するのはやはり差別意識があって、もし自分が部落だったらと考え、悲しみを背負った人の立場に立つことができないことだと思います。また、悲しくなって涙が出てくるのは、自分が差別するのはいけないと頭でわかっているけど、そのようになってしまうのは、やはり差別意識があるからだだと思います。

MM(男)Nさんの意見について同じみただけど付け加えます。部落と聞いてなんか重苦しくなるのは、いくら勉強していてもあるし、やはりその時は差別意識がむき出しになっているようにぼくは思います。今までに何度か学習してきたけど、真剣に取り組んでいるというのは中学校2年になってからで、真剣に取り組むことによって、部落に生まれたということが恥ずかしいことではないんだと学習によって段々とわかってきました。最初、部落に生まれたということがわかったとき、大きなショックがあって、そのショックが自分の中にある差別意識からきていると今までの学習の中からわかってきたけど、まだまだ自分の中から差別意識が出てくることがあると思います。

YI(女)それじゃあ、M君は今、自分をどう思っているんですか。

MM(男)今はやっぱりまわりに仲間がいるし、本音で打ち明けることのできる仲間をつくっていきたくて思っているから、自分をさらけ出すことによってもっともっと仲間を増やしていくことができると信じています。

T 7: M君の意見についてどうだろうか。

TF(男)M君は自分の考えをさらけ出して、友だちとかが変わった目で見たらどうしますか。

MM(男)その時は実際に変わったようでも、本当のことを語っていくことによって、日がたつにつれてより深い仲間というものができてきたように、今は思えるようになってきました。

YI(女)F君に言いたいんだけど、本当のことを言って見る目が変わる友だちはそれまでだし、本当のことをわかろうとしてくれる人でなければ友だちとは言えないと思うし、本当の友だちをつくるためにも、自分が部落出身であることを言ってしまった方が、私はいいと思います。

MM(男)F君にぼくが公開授業で部落出身と言った時に、友だちの目が変わったような気がするのと相談したことがあったんだけど、そのことを気にかけてくれていると思うんです。その時は変わったような気がしたし、実際にも変わったように思うんだけど、今は段々その友だちとも、心をわかり合うことができるようになってきたと思うんです。やっぱり自分をさらけ出したら、相手の心も開いてくれると思うし、今は心のつかえがなくなって、みんなに部落出身であることを言ってよかったと思います。

TF(男)M君からまわりの目が変わったように思うと聞いた時には、ぼくもびっくりしたし、まさかM君みたいに堂々と語れる子が、気にしているとは思ってもいなかったし、こんなに部落問題の勉強をしてきたのになんでかなあと思ったんです。まじめに頑張っていっても不安になる子ができるし、丸岡さんたちのようにみんなが「恥ずかしがることではない」という思いをしっかりつかんでいかないかと思っています。

T 8: F君やM君の思いに寄せて語ってみてください。

SE(女)M君の意見についてなんだけど、自分が部落出身だと言って差別するような仲間だったら、前も言ったけど、結局そんな友だちだったら、最初からつくらん方がいいと思います。部落と

言っても、同じように頑張ってくれたり、仲よくしていくことのできる友だちをつくるのが大切だと思います。私は本当のことを言って離れていく友だちを10人つくるよりかは、本当の思いがわかり合える友だちが1人いた方がすばらしいと思います。

SN(女)M君が部落に生まれたことを訴えることができたのは、やっぱり信頼できる人がいたからちゃんと言えたんだと思いました。それなのに、部落だと聞いて、どうしてもその人の見方が変わる人は、その人に勉強不足のところがあったり、差別意識もあったと思うけど、その人もその人なりに自分の中にある差別意識とたたかっていたのではないだろうかと思いました。

T 9: 次のところを考えていきます。「部落の子が非行に走る、手におえなくなる。その時にその子の裏側、差別の中に置かれている差別の実態を知って、その子の身になって考えていかなければならない」と丸岡さんは資料の中で訴えています。丸岡さんが部落問題の学習の中から、子どもの裏側、差別の実態まで、その身になって考えていかなければならないと感じていったことについて、みんなの思いを発表してみてください。

KH(男)差別のこと、部落に生まれたことなど、友だちの一番つらい部分を言ってくれる。ぼくはそんな友だちと本当の友だちになりたいと思います。口先だけでなく、その苦しみを自分のことのように感じていくことのできる仲間になっていかなければならないと思います。

MM(男)今まで学習してきた資料の中にあっと思うけど、地区外の子が悪いことをして非行に走っても、その子やその家だけの問題になっていくけど、部落の人が一人悪いことをしたら、部落全体を差別していくような社会があると思うんです。それは社会全体にまだまだ部落問題の学習が十分でないからそうになってしまうと思うんです。実際にぼく自身もこの学習に真剣に取り組み出したのは中学2年からだけど、差別する人には以前のぼくたちと同じように本当の学習がなされていないから平気で人を差別していく人間になってしまっていると思うんです。ぼくはしっかりとした部落問題の学習をしていくことによって、自分自身の中にある差別意識が段々と見えてきて正していくことができるようになるけど、しっかりとした学習がなかったら、自分の差別意識は段々と大きくなっていくと思います。

YI(女)私も非行に走る裏側までわかっていくことが必要だと思います。表面で説教するのは簡単だけど、そこからは何も生まれてこないように思います。だけど、今の私の本当の気持ちは、どうして部落に生まれたということだけで、非行に走っていくのかはちょっとわかりません。やっぱりそんな考え方はあかんのだろうけど、自分の本音を言ってみました。

SN(女)M君の話にもどるんだけど、私も、M君が言ったように、部落外の人が悪いことをしても、その子一人だけが悪いというんだけど、部落の中のだれか一人が悪いことをしたら、ああやっぱり部落は悪いという感じで、部落全員を悪いというように見ていってしまうところがあると思います。部落にも、部落外の人にも、どちらにもいい人がいて一生懸命頑張っている人がいるのに、どうしてそんな見方しかできないんだろうかなあって、すごく恥ずかしくなることがあるんだけど、この勉強をしていくうちにこんな考え方は間違っているなあということがわかって、前までは部落差別はなくならんと思っていたけど、みんなでこの授業に頑張っていくうちになくなるんだという気持ちに変わってきました。

HI(男)さっきから気持ちがごちゃごちゃになって、何を言ったらいいのかわからないところがあるんだけど、やっぱり非行に走る子は意志が弱かったんだと思います。差別と共に闘っていく友だちがいなくて、負けてしまったところもあると思うけど、差別に負けて非行に走るというのは、自分が部落出身だということによって涙を流すということにつながっていると思います。

SN(女)この勉強をし始めて、家族でもよく話し合うようになったんだけど、部落の子が非行に走るということを前に家族で話し合った時に、部落の子が自分が部落とわかった時に3通りの道があるということをおとうさんが言ったんです。3通りの道というのは、一つは部落ということと、それをずっとかくし通して、いつばれるかわからないという感じでひやひやしなから生きていく道と、それとももうどうなってもいいわという感じで開き直って悪いことをしたりする道と、もう一つが、差別は間違っているということを訴えて部落解放に向けて生きていく道の3通りに分けられると言ったけど、部落解放に向けて一生懸命取り組んでいく人の方がすばらしいなあと思います。

YI(女)私もNさんと同じ意見で、部落に生まれたということをつらがるんでなくて、反対にそのことをバネとして差別されるということに怒って頑張っていかなあかんと思います。

MM(男)だけど、実際に学習したからわかってきたようなもので学習がなかったら、自分も部落解放の道には進まなかったと思います。

YI(女)そしたら、M君は悪いことをするんですか。悪いことをしたらその分だけ、部落が悪いように見られるんと違うんですか。

SN(女)二人の言いたいことすごいわかるんだけど、やっぱりM君が言うように学習がいると思うんです。私もこの学習がなかったら、間違った考え方でずっといたかもしれないし、部落の人が悪いことをすれば、また部落じゃという感じでどんどん差別されていくというのはわかるけど、私たちが今、一生懸命勉強していろんな人に授業なんかを見にきてもらって、見に来た人たちに私たちの気持ちを訴えることによって、見に来た人たちが家に帰っていろんな話をして、どんどん私たちの気持ちが広がっていけば差別はなくなると思います。

MM(男)さっきNさんが3通りの意見を言っていたけど、今、自分が進んでいるのは部落解放への道だと思うけど、もし学習がなかったら、まあぼくは非行の道へはいかなかったとは思うけど、かくし通していたと思います。

T10：丸岡さんもそうでなかったらどうか。丸岡さんがふるさとの詩を書き、またさまざまな部落を語る、差別をなくすための詩を書くようになった。それは差別をなくすための学習があったからだと言う。そして、信じ合い、何でも話し合える仲間がいたから、堂々と差別解消に向けて自分をぶつけていくことができたと言われる。信じ合い、何でも話し合える仲間、これはみんなを見ていてしみじみ思うことです。この丸岡さんの思いに寄せてみんなが思うこと、感じることを語り合しましょう。

JK(女)私は3年生になるまでは、自分が部落出身であることを絶対かくしていこうと思っていました。でも、いろいろな資料を勉強し、みんなの意見を聞いて、その言っていることを本当だと信じたとき、この仲間だったら私の一番つらい思いを打ち明けられることができると思うようになってきました。今、私は二人の友だちに自分が部落出身だということを打ち明けています。まだ二人しか本当の友だちはいないけど、これからはもっとたくさんの本当の仲間を増やしていきたいです。

T11：Jさんの思いを受けとめてほしいと思う。

YI(女)私もJさんにそのことを打ち明けてもらったんだけど、自分の一番苦しい部分を打ち明けてくれたんだから、私も心を開いて頑張っていかないかんと思うようになってきました。今、まだ二人にしか言えなかったかもしれないけど、もっとクラスの中の人たちがJさんの気持ちを受けとめて、みんな今の時間を大切にしてほしいと思います。

MS(女)今、3年生でも、何人かの人、自分が部落出身ということを全体学習なんかで言ったんだけど、今、Jさんが二人だけと言ったけど、ここにいる3Bのみんなの前や多くの先生方の前で言えたんだから、信じてくれたと思いたいです。私も部落に生まれたんだけど、恥ずかしいと思ったこと一度も……なかったけど……ほなけど言うて差別されたいやじゃと思うてずっと言えなかったけど、このクラスの子だったら、信じることができるからこのことが言える。

SE(女)KさんとSさんが言ってくれたけど、これから今日打ち明けたことを後悔するようだったら、私やはいったい今まで何をしてきたんかと思ってくれていいと思います。私も部落ということを言うた子を変な目で見ようなんて一つも思うてないし、見たらごっつい自分があほらしいなってくると思います。それで、この前読んだ本で心に残っていることなんだけど、一応世間で言う親友とは、親しい友と書いて何でも話し合える友だちということだけど、本当の親友とは、心の友と書いて自分の恥ずかしいところでも、何から何まで端から端まで話し合える友だちを心友というそうです。私もそんな心友をたくさんつくりたいです。

TK(女)私も部落出身ですが、このクラスのみんなだったらこのことが言えると思います。この前友だちに自分が部落出身ということを打ち明けたら……「ほんなん関係ないでえ」と言ってくれました……。私は本当の友だちがいたんだということがわかったのでよかったなあと思いました。

KK(女)私はさっきKさんの学習プリントを見せてもらったんだけど、最初見せてと言ったとき、いやじゃと言っていたけど、Kさんだったら信頼できるけんていうて見せてくれたんです。私やが信頼できる友だちになっていかないかんと思います。

T12: みんな二人の発言をどう聞いたですか。

MO(女)私もKさんに打ち明けてもらったんだけど……。

T13: Kさんの分もがんばらな。

MO(女)信頼してくれていると言ってくれたんだけど、まだまだ力になれていない……。もっと勉強して、Kさんの力になっていくことのできる人間になりたいです。

KU(男)まだ発表もできないでずっと座っているだけなのに、みんな信じてくれて発表してくれるのに、自分はこんなことしよっていいんだろうか。このクラスの子を信じて発表してくれるのにこんなことしよっていいのかと思いました。

SN(女)私はちょっと前に、まだこの勉強を始めて少ししかたっていない時に、ある友だちから部落出身じゃということを打ち明けられて、なんとなくわかっと思ったんだけど、本人から聞いてその子泣いていたし、ショックだって、夜とかあまり眠れなかったんだけど、そのことを打ち明けて涙を流している子を見たら、腹が立ってきてこういうふうにもその子をここまで追いやる差別を許せないと思います。

KT(女)私も部落出身ですけど、泣いている子を見たら泣いてほしくありません。そして、その泣いている外側だけ見てほしくありません。悲しみが深いから涙が出てきて止まらないんだけど、この悲しみや苦しみがわかっている友だちがこのクラスにいっぱいいるし……。本当は今、泣きたいんだけど、涙をこらえています。

MM(男)やっぱり自分から心を開くことによって友だちも心開いてくれるということが、今、本当にわかってきたと思います。心を開くことにより信じ合う友ができ、お互いに本音で思いをぶつけ合うことができると思います。お互いに涙が出るというのは、涙を流す友だちの気持ちはわからないことはないけど、これからの学習によって涙は出てこなくなると思います。実際に

ほくもこのクラスでは、信頼している友はたくさんいるし、全体的にも友だちはたくさんいる方だったけど、表面的な友だちがほとんどで本当に信じ合った友だちはあまりいなかったと思うんです。でも、この学習によって、信じ合える友だちがほく自身の中で増えていったと思います。自分から心を開くことによって、まわりの人も心を開いてくれたことが本当にうれしいです。心開いてもまわりに反応がないんだったら、少しもおもしろくないと思います。この頃、公開授業や全体学習のある場面で口先だけでいい意見を言ったって、公開授業や全体学習の別の場面で寝ていたりする子が目に入ったら、とても腹が立ってめったに怒らんつもりなんだけど、自分でも押さえきれんぐらい腹が立つ時があるんです。でも、押さえないかんとって押さええています。みんなも頑張ってほしいと思います。

HI(男)ほくも部落の人間です。今までこのクラスにもそのことをわかってくれる友だちはいないと思っていたけど、「みんないいなあ」と思いました。森口先生に家庭訪問の時に「お前は部落の人間だ」と言われたとき、自分には差別意識がないと思っていたけど、実際にありました。それで、この授業では泣かないと思っていたけど泣いてしまいました。これからこれをバネとして部落解放の道に進んでいって、気軽に部落の人間と言えるような社会をつくっていききたいです。

SE(女)みんな泣きながら語ってくれているのに、涙が出てこん自分に腹が立つんだけど、心の中は泣きたい気持ちでいっぱいです。話は最初にもどるけど、OさんがさっきKさんの力になれないと言ったけど、みんな部落出身だと打ち明けた後も、いつも通り接していくことじたいが、その子の力になって一緒に闘っている証拠だと思います。

YI(女)私もOさんの意見についてだけ、私も、OさんはKさんの力になれていないと言っていたけど、ここで手を挙げて発表することがその人を支えていくことなんだと思います。今日一度も発表していない人がいると思うけど、ここで座ってお客さんのまま終わったら、みんながこうやって心を開いてくれているのに、その人の気持ちを踏みにじることになっていくと思います。絶対一度は発表してどんなことでもいいけど、その人の思いに応えてください。

KO(女)みんなの前で涙を流して発表している子を見ていたら、涙を出したいんだけど、心の中で泣いているけど、涙が出てこないという感じです。授業を今のうちにやっておかなければ、その人たちを自殺に追いやるかもしれないから、今のうちにみんな心を開いて、この学習を頑張っていかなければいけないと思いました。

MM(男)ほく自身、あまり人の涙を見るのはいやなんだけど、人の涙によって、自分の心の中になんか突き刺さって行って、これからの発表とかのエネルギーになるものがいっぱい生まれているように思います。涙を流してまで言ってくれるのはうれしくて、ほく自身も泣きたい気持ちになっているし、みんなも涙を流して語ってくれる仲間の思いが心の中に突き刺さっていると思うから、どんなことでもいいから、まわりの人に、その思いをどう受けとめたか発表してもらいたいと思います。

SN(女)みんなこんなに一生懸命になって発表しているのに、どうして下を向いていられるのかと思います。信頼されているんだから、何か言いたいという気持ちはみんなあるんだと思うけど、信頼してくれている人に何でもいから応えてほしいです。

MT(男)みんながほくらのことを信じて真剣に発表してくれるのに、ほくはその思いにあまり応えられていないので、これからは手を挙げて堂々と発表できるように頑張りたいと思います。

KK(女)IさんやNさんの意見に付け足すようになると思うんだけど、一回も発表していない人は、

みんなが泣きながら訴えているのに何も感じないんですか。何か思っているんだったら、手を挙げて発表してください。

RH(男)ぼくは親から部落のことを聞かされて、中学校に入る前は部落というのがすごく恐かったんだけど、中学校に入って部落の友だちができたんだけど、みんないやつばかりで、ほんまに部落差別を壊さないかなあと思いました。

KM(男)ぼくは今までほとんど自分のことばかり考えていて、友だちが部落だといってもあまり真剣に考えていませんでした。今日の授業でもみんな泣きながら自分のことをどんどん言っているのに、支えることのできない自分がすごく情けないです。今回の発表をバネとして、みんなに応えられる人間になるように、これからの授業でどんどん発表して信頼し合える仲間をつくりたいと思います。

HM(男)今まで発表してくれた子は、ぼくや他の子を信じて発表してくれたのに、今までぼくは心が重苦しくなって発表できなかったので、この授業を土台として部落差別を壊して重苦しくない社会をつくっていく一人になりたいと思います。

MI(女)今まで自分のことを打ち明けてくれた人に対して、ずっと私はうつむいてばかりいたんだけど、今まで学習してきた本当に自分自身の心から自分の一番つらいことを言えるのは、まわりが信頼できるということで、Nさんがさっき言っていたけど、みんな信頼されていると言ってきて、私も信頼されているのかなあとと思って、だけどどんどん発表できないというのは、自分の心の中にまだまだ差別意識があるからだと思います。これからもこの差別意識と闘って発表していきたいと思います。

SF(女)私もあまり人の涙は見たくないんだけど、私だって、中1のときは泣きたかったし、今までだって我慢してきたし……、差別っていうのはつらいから……、中1のときに味わった思いはもう二度と味わいたくない。差別に苦しむ人の姿も見たくない。みんながそんな苦しみを味わうことのないように頑張って勉強していきたいと思います。

KN(男)みんなは信頼してくれているけど、ぼくにはまだ信頼される程の力はないと思います。みんなに信頼されている限りは、みんなの期待を裏切らないように差別をなくすために頑張りたいです。

T14: 時間がきました。最後に委員長まとめてくれるか。丸岡さんとは、みんなにとって何であるのか。丸岡さんの生きざま、生き方を学習してきたことは何であったのか。

YI(女)先生にとって丸岡さんとか、みんなにとって丸岡さんとかは、すごい人かもしれないけど、私にとって丸岡さんというのはただのおじさんです。私の丸岡さんは、みんなであり、先生であり、みんなの丸岡さんは、みんなであり、先生であり、みんなが悲しむことにより私も悲しくなり、みんなが頑張ることにより、私も頑張らないかんと思う。私の一番中心はみんなです。この勉強をするにあたって絶対みんなを泣かしたくないと思います。みんなが笑ってちゃんとやっつけていけるようになるまで、ほんまにみんな頑張っていかなあかんと思います。みんな頑張らしましょう。

T15: 終わります。